教育最前線

The Front Line of Education

なぜ学校教育に芸術教育が必要なのか

～子どもの感性や想像力を育み、学校と地域の連携も生む～

現行の学習指導要領では、芸術教科関連の授業時間数が以前に比べ大幅に減少しています。しかも、基礎学力重視の風潮が高まる中、音楽、図工（美術）といった芸術関連教科や総合的な学習の時間よりも主要教科の時間増を望む保護者の声は少なくありません。

その一方で、感覚や感性を陶冶する芸術教育が、豊かな人間性を培ううえで不可欠であるという認識から現状を憂う声も聞かれます。

世界的に広がる芸術教育を重視する動き

世界的な視野で見ると多くの国で、21世紀の学校教育では芸術教育を中核に位置づけようとする動きが活発になっています。

１９９９年のユネスコ総会では「学校における芸術教育と創造力振興のためのアピール」が発表され、詩、美術、音楽、演劇、ダンスや映画などを含めた芸術教育を学校教育の必修とする提言がなされました。こうした動きと呼応するようにアメリカ、イギリス、フランス、中国をはじめとする多くの国々では、産業の活性化とその国際競争力を維持するためには創造力育成の担い手として芸術教育が不可欠であるという認識に立った教育改革を進めようとしています。ちなみに90年代、アメリカでは、「芸術教育は基礎学力の向上に資する、芸術教育を受けた児童・生徒の共通学力テストの成績が高い、心理療法的効果が高い、学校の雰囲気を改善する、情報化時代に即応した批評能力を高める」といった調査報告が出されました。これらの見方は芸術教育そのものの価値を認めることにつながったわけではありませんが、子どもの創造性や感受性を豊かにする時間を保証することになりました。

芸術教科の年間授業時間数

（　）内は旧学習指導要領に示された時間数

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
小学校	音楽・図工	**68**(68)	**70**(70)	**60**(70)	**60**(70)	**50**(70)	**50**(70)
中学校	音楽・美術	**45**(70)	**35**(35-70)	**35**(35)			

文化芸術施策と実際の芸術教育との隔たり

日本では２００１年、文化芸術振興基本法が成立したのを受け、文化庁は「新世紀アーツプラン」を立て、感動体験をもとに感受性を育むための「こどもの文化芸術体験活動の推進（文化芸術創造プラン）」などを具体化させました。そして、本物の舞台芸術の鑑賞機会の提供、地域の芸術家や伝統芸能の保持者の派遣、文化財への直接体験ワークショップの実施などを行おうとしています

このような施策によって学校完全週５日制の実施に伴う社会教育と連動した芸術文化の活動への参加の促進や、「総合的な学習の時間」における芸術教育のかかわりを考えた活用などが期待されました。しかし、基礎学力重視という流れの中で、現実にはそうした機会の保証が困難になっているのが実情です。芸術とかかわる機会を子どもたちからこのまま奪ってしまっていいのでしょうか。

ここに81年と97年の子どもの絵を比較したものがあります【図】。97年のものは、人物の描き方を見ても記号化しており、家の周りの様子の認識もずいぶん説明的で稚拙になっています。絵の表現を通して感じ方や事物の認識を伝達する力が次第に衰えているように思われます。言葉の教育や算数の力だけを重視しても子どもの感性や豊かな表現力を培う

ことにはつながらないのではないでしょうか。

また、音楽、図工（美術）だけでなく、広く芸術と身近にかかわることで感受性を養うと同時に、地域や社会とかかわる力を高めることが大切です。

芸術教育の課題と今後の可能性

音楽、図工（美術）の授業時間数の減少によって芸術教育の役割やそれらの教科の意味そのものが低下したわけではありませんが、その価値の実効的な側面について懸念されていることは事実です。

子どもたちを取り巻く芸術環境は多様性を極め、ますます脱領域化していますし、複合感覚的なメディア芸術も当たり前になってきています。こうした芸術文化に接する子どもたちの教育を考えると、従来の音楽、図工（美術）の教科内容だけでこの状況に対処するのは難しくなってきました。映像、演劇などの総合メディア芸術や身体芸術などを含めた芸術教育を視野に入れる必要がありそうです。

芸術教科の時間数が削減される中でこうした考えはナンセンスに響くかもしれませんが、感覚教育や感性教育をめざすという意味では教科編成が見直されることも考えられます。音楽の教育、美術の教育といった思考自体が過去の遺物だとする指摘もあり、芸術教育を創造性と想像力を軸にしたアートの教育として広く捉えることの可能性も検討しなくてはなりません。

学校での「総合的な学習の時間」では、教科とは違った力を育てるうえでのさまざまな取り組みがなされています。メディアを通じてコミュニケーション能力を育てるものであったり、国際理解を目的とするものであったりするのですが、学習過程や発表の形式において芸術とのつながりを持ち、今後の芸術教育の方向性を示唆するものも数多く見られます。例えば、地域の伝統芸術の伝承活動を行ったり、身体表現として学習の成果を集約したりするものなどがあります。

自己を表現したり多様な芸術や文化に触れたりすることで芸術的な価値を尊重し、芸術文化に対する理解を図ることは子どもの芸術文化の創造という意味でも重要に思われます。子どもたちのイマジネーションが認知能力の発達に重要な影響を及ぼすことを再認識して、より柔軟で創造性にあふれた学習環境をリ・デザインしていくことが求められていると言えます。

兵庫教育大学における芸術教育に関する取り組み

兵庫教育大学には、音楽教育と美術教育にまたがる教育組織として芸術系教育講座があります。芸術教育が心の教育の一翼を担うという認識から、教育臨床講座などと連携してアートセラピーやミュージックセラピーなどの分野での研究協力を進め、授業設定の可能性の検討に入っています。芸術療法には医療的な側面もあるので難しい問題もありますが、芸術が持つ教育力の新たな側面にも注目しようとしているのです。

また、地域との連携という意味では今後ますます博物館・美術館や市民ホールと学校の連携を見据えた文化をマネージメントする力の育成も期待されることから、学芸員の資格などについても検討しようとしています。

【図】描画テストによって描かれた小学生の絵の変化

1981年 男子

1997年 男子

1981年 女子

1997年 女子

三沢直子著「殺意をえがく子どもたち」から　学陽書房1998年

教育最前線
The Front Line of Education

芸術教育と子どもの発達・発育との関係

絵を描き、唄を歌い、筆を使って文字を書く―。実技教育である芸術教育を通じて、子どもは身体の機能を高めていきます。また、良い作品を作るため知恵を絞り工夫を凝らすというように、感性や感覚を養う効果もあります。

ものづくりの意義

森岡茂勝
（工芸／芸術系教育講座教授）

ものづくりには、自分で使ってみたい生活道具や飾って楽しみたいもの、工夫して動かして遊ぶ遊具など、さまざまな分野があります。共通して言えることは、最初の構想段階やデザインに応じて、それに適した材料をあれこれ探したり、計画に沿って順序立てて積み上げていくといったこと。そして、工夫して出来上がった喜びは、何ものにも代えがたい達成感を味わえることです。自分で苦労して作った作品はこの世に一つしかないものですから。このように工芸・工作は、頭と手が連動して出来上がっていくものであり、作り出す喜びは心の解放を意味し、材料の特性を体験すること、特に自然材料を使うことは現状の自然環境の問題にまで関心を呼び起こします。「工夫して自分で作ってみる」ことはいつの時代にも人間として大切な要素です。

心を育てる美しい日常

浅川潔司
（学校心理学／教育臨床講座教授）

私たちは美しいものに何気なく心を寄せ、五感を働かせて楽しみ、心を癒します。それはあまりに日常的に過ぎてその営みと心への作用の貴さを時に忘れがちです。文学や音楽、美術などの美の化身は、教育の世界に留まり難くなっているのが昨今の風潮のようですが、このままでは子どもの心に潤いを枯渇させてしまいます。人間は幼少より音に色を見、形に感情を移し、動きに音を寄り添わせます。心身の発達につれてこの素朴な心の働きに注意や抽象の機能が加わります。そして、その発達的変化は、芸術によって大きく支えられています。芸術は人を癒しますが、癒しを必要とする世界に子どもを追い込む作業は教育になじみません。子どもにとって、美はさりげなくあるものでしょう。

言葉を補う演技

長尾義人
（音楽学／芸術系教育講座助教授）

詩経の「大序」には、心にある情動を表現する時、詩として言葉を発するだけでは十分にそれを伝えることはできず、手や足でそれを表現して初めて伝えられる、と書かれています。はるか3000年前の中国の人々は、身体を駆使して表現することの意義を直感していました。しかも、人類が自然環境の中に超越的なものを意識した時には、目に見えない聖霊との交信のために激しい身体運動によるトランス状態という手段を学び取りました。ここにさまざまな民族が持つ芸能が始まります。身体は、その意味で演ずることを生み出すブラックボックスであると言えます。そして、身体による演技は、人類の進化とともに形式化され、舞台芸術へと進化していきました。身体という装置は表現という手段によって、内なる感情を永遠の時間へと飛翔させるのです。

家庭　学校　地域

私が考える芸術教育

学校での芸術教育は、子どもにどのような効果をもたらし、また現状における課題はあるのでしょうか。家庭、学校、地域の立場から語っていただきました。

家庭　子どもたちの合唱する姿に芸術教育の必要性を実感

附属小学校PTA役員
臼井智恵美さん

常々、音楽や図工の授業は子どもの隠れた才能を見つけ出す機会だと思っています。先日、「附小っ子コンサート」（音楽会）を観ましたが、みんなで力を合わせて歌ったり演奏したり…。こういう機会は学校生活の中で貴重であると、あらためて実感しました。また、音楽や図工は子どもにとって息抜き的な要素もあると思います。作品を作るのに友達同士でアイデアを交換するなど、他教科と比べて会話もできますよね。

今年の4月、1年生の次女が新しい「ココロンカード」を持って帰ってきた時は、今年こそ美術館や博物館に連れて行こうと思ったのですが、いつの間にか存在を忘れています（笑）。3人の子どもも大きくなり、行動範囲を広げるためにも大いに活用したいですね。

ココロンカード…兵庫県が県内の小中学生に配布。県立の美術館や博物館、有料公園をはじめ、一部の公立・民間の美術館、博物館などで、窓口で提示すれば無料で入れる。

学校　限られた授業時間でいかに子どもの能力を引き出すか

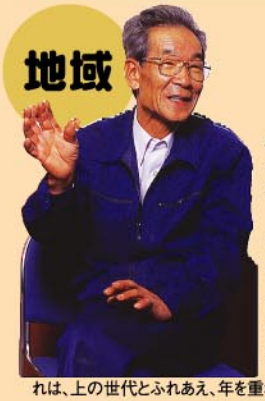
附属小学校音楽科教諭
門田モトミさん

昨年度からの新学習指導要領の導入に伴い、高学年は週2時間だった授業時間が2週で3時間に減りましたが、授業の進め方にさほど変化はありませんね。題材や活動によっては、子どもたちのイメージが頂点に達するまでに時間がかなり必要な場合がありますが、そういうときは、ただ時間を与えればよいということではなく、教師の指導力が問われているのだと思います。また、次の授業まで1週間空くと子どもの意識が途切れてしまうこともあります。学習をどう組み立てていくか、難しさを感じますね。

音楽の授業は、音楽そのものの素晴らしさはもちろん、子どもたちが協調性、大げさに言えば社会性を学ぶ機会でもあると思います。友達が大きな声で歌うから自分も歌う。その逆もしかり。みんなが一つになって歌い上げた充実感は心に残るものです。

子どもは合唱や合奏などを通じ、自分たちで工夫を凝らしながら音楽をつくり上げていく喜びを知る。

地域　郷土の文化に触れることは人間教育につながる



やしろ鴨川の郷館長
東谷　保さん

私が住む社町上鴨川地区では、毎年10月、五穀豊穣、家内安全を祈願して神事舞を奉納します。700年の永きにわたって神事舞が続いてきたのは厳格な宮座制度によるものです。若衆、清座、年老から成る宮座は、長男しか入ることを許されません。現在は小学4年から若衆に入るのですが、初めて練習に参加した子どもはいかにもつまらなさそうな顔をしています。それが2年目になるといきいきとした表情に変わってくるんです。それは、上の世代とふれあえ、年を重ねるとともに郷土愛が芽生えてくるからだと思いますね。

子どもは舞いにかかわることで感性が育まれ、社会性を身に付けていく。学校教育でも同じことが言えるのではないでしょうか。もし、芸術系の教科がなければ、真の人間教育はできないのではと思いますね。

鎌倉時代後期から毎年欠かすことなく行われ、神事舞としては県内で唯一、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

「ものを見る」ことの技術と努力

喜多村明里
（美術史学／芸術系教育講座助教授）

世の中には専門的・職業的な「ものの見方」があります。例えば、ヒヨコ鑑別士（養鶏業界の専門職）は1分間に30羽余りの雛の性別を見分けます。ヒヨコの排泄口を見つめる鑑別士の眼には、経験と訓練により培われた「見ることの技術」があるわけです。美術作品を見る場合にも、ある程度同じことが言えます。作品を数多く見る経験を重ねた人は、作品を見ること自体に慣れ、「見どころ」を素早く見つけ出します。逆に、「見ている」としても「見ていない」または「見えていない」人は、ただ漫然と眺め続けるだけです。むろん、「美術鑑賞」は自由であり、ヒヨコ鑑別のような明確な答えはありません。しかし、「努力して見る」ことの積み重ねこそが、美術における「ものの見方」の基礎なのです。目と脳みそを働かせて「考えながら見る」ことが、大切かつ必要だと思います。

音楽教育は自由な発想や表現を大切に

森川京子
（器楽／芸術系教育講座教授）

ヨーロッパのある指導書で次のような言葉を見つけました。「今の時代は、理論的なインテリジェンス（能力）やテクニカルな思考力ではなく、大きな創造（想像）力が要求されている。このことを見逃してはいないでしょうか」。創造力は、自分を表現（アピール）することや人とのコミュニケーションが上手にできる、すべての事柄において理論的な思考を刺激し豊かな発想を生むことができるなど、人生を豊かにします。この創造力は音楽で培うことができます。人間形成において音楽はまさに主要教科と言えるでしょう。今の日本の音楽教育は正しく、美しく表現することに固執していないでしょうか。もちろん、これも大切なことです。しかし、音楽は心を表現するもの。もっとおおらかに、地声でも、音程が外れても、子どもたちの自由な発想や表現を大切にしてやりませんか。これこそ大切な音楽教育だと思います。

子どもたちの個別の教育ニーズに応える援助をめざして

現在、文部科学省の特別研究促進費を受けながら「不登校児童生徒の適応の場に関する総合的研究（平成14年度～16年度）」というテーマで、義務教育段階の子どもたちに学習機会を提供する適応指導教室など学校外施設の今後の望ましい在り方や学校復帰に向けた援助の在り方等について総合的に研究を行っています。研究メンバーは、相馬精一先生（広島国際大学）を代表とする10人です。各々、臨床心理学、特殊教育、生徒指導、進路指導、教育相談などの専門家であり、不登校、適応指導教室、特別支援教育、スクールカウンセラー制度の理論面・実践面・行政面などに精通しています。

不登校児童生徒数は、最新の文部科学省調査では若干減少傾向にあると言えます。しかし、14年度は前年度より8000人減少したとはいえ、13万1000人と依然高い数値を示しています。学校教育という観点からは深刻な教育課題ですが、考え方によっては子どもたちが自分らしい生き方に対して真剣に悩み、模索していると言えるのではないでしょうか。不登校でない子どもたちも「生きる目的が見つからない」「何のために学習するのか、高校や大学に行くのか分からない」「自分に合った職業に就きたい」と悩んでいます。元気に学校に行っている子どもも、何かのきっかけでいつ不登校に陥っても不思議ではないのです。そう考えると、不登校という教育課題を解決していくには、子どもたちの個別の教育ニーズに私たち教師や保護者がどう応えるのかということに他なりません。

その対応方法は、必ずしも学校だけとは限りません。例えば、私どもが研究対象としている適応指導教室は、一般的な学校とは異なる個性的なカリキュラムを持っています。このような子どもたちの個別の教育ニーズに応える学校外機関が、不登校の子どもにどのような教育効果をもたらすのか。日本国内だけでなく、国外の同種の制度からも研究を行っています。

私の主な担当は、国内の適応指導教室のスタッフ構成・カリキュラム・成果と課題を明確にすることとアメリカにおける不登校対応制度についての研究です。また、研究と並行して、文部科学省の「不登校への対応の在り方に関する調査研究会議」と「学校と関係機関との行動連携に関する研究会」の調査研究委員を務めています。その場でも、不登校や問題行動の子どもたちに対し、私たちがどう向き合うのかを複眼的かつ具体的に議論しております。今後とも、学校現場に寄与できる教育・研究に精進致す所存ですので、ご助力のほどよろしくお願い致します。

http://www.edu.hyogo-u.ac.jp/shido/yatunami/index.html

生徒指導講座助教授
◎Yatsunami Mitsutoshi
八並光俊

研究メンバー
伊藤美奈子（慶應義塾大学・助教授）落合俊郎（広島大学・教授）佐々木直美（広島国際大学・助手）相馬精一（広島国際大学・助教授）花井正樹（東海女子大学・助教授）早坂方志（青山学院大学・助教授）三浦正江（広島国際大学・講師）横山利弘（関西学院大学・教授）渡部邦雄（東京農業大学・教授）

「和文化の風」を学校に
―文化創造アプローチを視点に―

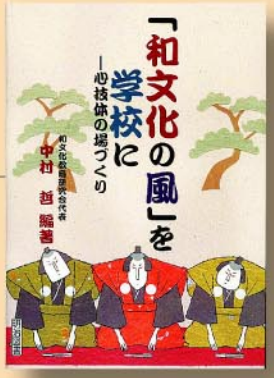
社会系教育講座教授
◎Nakamura Tetsu
中村 哲

研究メンバー（平成14年9月現在）
安部崇慶（教育基礎講座教授）アレキサンダー・ベネット（国際日本文化研究センター・助手）安東茂樹（京都教育大学・教授）小竹光夫（実技教育研究指導センター・助教授）佐藤真（総合学習系教育講座助教授）鈴木正敏（学校教育研究センター・助教授）高島英幸（総合学習系教育講座教授）田中由美子（芸術系教育講座助教授）茅原芳男（邦楽教育振興会理事長）永木耕介（実技教育研究指導センター・助教授）名須川知子（幼年教育講座教授）畑野裕子（生活・健康系教育講座助教授）藤本百男（附属中学校教諭）松下健二（実技教育研究指導センター・教授）森岡茂勝（芸術系教育講座教授）安原樹（生徒指導講座助教授）渡信雄（附属小学校教諭）

私どもの研究は「学校教育に和文化の風を」のキャッチフレーズで文化的価値に根ざす児童・生徒の人間形成と学校、地域、国内外における文化創造を目的としています。

昨年度の学長裁量経費の援助を受け、本学の教官を核に和文化教育研究会として発足しました。和文化教育とは、日本の伝統や地域の文化に基づく教育です。と言いますと、愛国心や郷土愛の道徳教育と思われるかもしれません。そのような見解とは異なり、和文化自体の価値を心技体の場において継承し、発展させる文化創造アプローチとしての教育です。また、和文化教育の〝和〟には調和と平和も含めています。調和は自然と人間、心と体が和する状態を意味し、和文化の本質です。平和は国内外にて戦争のない状況を意味し、文化創造の基盤です。

昨年度の研究成果として、共同研究者を核に和文化教育にご賛同をいただきました方々のご協力を得て、今年10月に『和文化の風』を学校に―心技体の場づくり』（明治図書）を刊行しました。第Ⅰ章では、山折哲雄先生（国際日本文化研究センター所長）に和文化の本質を京都における行事や祭りを通して解明していただき、河内厚郎先生（文芸・演劇評論家）からは伝統芸能の起源、三味線音楽による芸能文化の発展経過、和文化と世界文化との関連を指摘していただいています。このような和文化専門家の方々の知見を視野に、これまでの和文化教育の在り方を批判し、文化創造としての和文化教育の理論的示唆と芸道の稽古論に基づく教育原理を述べています。さらに、和文化教育の先駆け的役割を担った和楽器の活用による音楽教育の改革と指導、外国人の視点から武道の本質と武道教育への提言に関する内容になっています。第Ⅱ章では、和文化教育の授業を教育課程の観点から教科指導、特別活動、総合学習、保育指導、地域交流活動の5つの場に設定し、和文化の技術を伝承するとともに自分づくり、学校づくり、地域づくりに創造的関与を生み出している実践例を紹介しています。教科指導の事例としては、「筆先で確かめよう、しなやかな日本の文字文化」「半蔵の『からくり人形』機巧に迫るものづくり」「『じゅうどうあそび』による体ほぐし」「土佐弁を用いた英語教育」「歌舞伎衣装にアイヌ文様の摩訶不思議」を紹介しています。他の事例としては、箏曲、播州歌舞伎、丹波焼、郷土芸能、日本舞踊、太鼓演奏、淡路人形浄瑠璃、壬生狂言など多彩な実践を取り上げています。第Ⅲ章では、和文化教育の情報交流を意図するウェブサイト「和文化教育の風」(http://hsdb.soc.hyogo-u.ac.jp/wabunka/index.htm)、和文化領域のウェブサイト、和文化授業事例データベースを紹介しています。

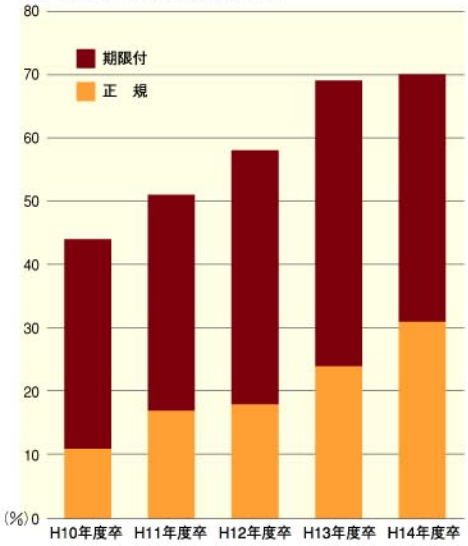


このような研究内容は、これまでの教育課程と授業の編成、児童・生徒の学力、学校と地域の関連などを改革する新たな羅針盤を示し、学校と社会における教育力の創生に寄与すると言えます。本書の出版を手掛かりに、和文化教育研究会を発展させた文化創造としての和文化教育交流の場づくりを呼び掛けたいと思います。その呼び掛けを促進するために本著に続き、『和文化―日本の伝統を体感するQA事典』（明治図書）の編集を進めています。皆さまのご支援とご協力を期待しています。ご関心を持たれた方は、連絡をお願い致します。

tenaka@soc.hyogo-u.ac.jp

学生の就職活動を支援する就職相談室

●卒業生の教員就職率



卒業年度	H10	H11	H12	H13	H14
正　規	11.1%	16.7%	17.7%	23.7%	30.6%
期限付	32.9%	33.8%	39.4%	44.7%	39.2%
計	44.0%	50.5%	57.1%	68.4%	69.8%

注：各年度とも、3月卒業者数に対する割合（翌年度9月30日現在）

就職活動は、学生の皆さんが社会への参加を意識し、自分を見つめ、自発的に学ぶ意味を自覚する機会でもあるという意味で、きわめて教育的な活動であると言えます。就職相談室はこうした学生の皆さんの就職活動を支援するためのものです。

本学は教員養成大学として学生の皆さんを、学校現場のさまざまな課題に対応できる実践的な能力を備えた教員として教育界に送り込む責務を負っています。就職相談室では一人でも多くの学生が教職に就けるよう、学内・学外の先生方に相談員として協力していただき、相談業務を行っています。このほか、就職セミナーや教職講座、教員採用試験説明会、模擬試験・面接なども企画・運営しています。

就職相談室には就職担当職員が2人常駐しており、随時、学生への情報提供や相談に応じる体制を取っています。また、各種資料や情報検索用のパソコンなども設置し、情報交換の場としても活用されています。

本学卒業生の教員就職率は年々向上し、平成11年度と13年度には、全国48の教員養成系大学・学部の中で第1位の成績に輝いています。これからも学生の皆さんの教職への夢をかなえるため、支援を続けていきます。

子どもたちが求めている教師とは

学外相談員 元公立小学校校長
城谷義子

現在の日本の国はどうなってしまったのだろうか。実母がわが子を虐待したり、殺してしまったり。「先生」と呼ばれ、人から尊敬されなければいけないはずの教師が、教え子にセクハラしたり、傷つけたり。毎日のニュースを見ながら、私の神経も麻痺してしまって「えっ!またか」とうんざりするだけで、驚かなくなってしまった。まったく恐ろしいことである。

私が、兵庫教育大学の就職相談室にお世話になって5年になる。十年一昔どころか、この5年間の社会の激変ぶりは、筆舌に尽くしがたい。もちろん学校現場も大きく変わった。こんな時代が来ることを予想していたわけではないが、私が子どもたちを指導していたときのモットーは「いつ、どんな社会になろうとも何が起きようとも、生き抜く力をつけること」であった。それは、私自身が父親を戦地に捕られたまま小学4年生で終戦を迎えるという、戦中戦後を経験しているからである。

目先にとらわれていては、大事な将来への展望を見落としてしまう。一生という枠組みの中で一人ひとりの子どもを見つめてあげたい。その子の生涯を考えたとき、今、してあげなければならないことは何か。たとえ、親の意見と多少の食い違いはあっても、子どもを中心に据えて命懸けで親をも指導していかねばならない。教師とはそんな職業だと思う。

不思議な縁で出会った子どもたち（現状では子どもは教師を選べない。近い将来は分からないが…）。子どもの1年間の成長は著しい。その成長をどれだけ支援できるかが教師の力量であろう。そのためには、目の前の一人ひとりの子どもの現状を、現実を、家庭環境も含めてしっかりと捉えなければいけない（ただし、独断と偏見で見ないように）。そうでないと何をどう支援していいのか方策が立たない。無い知恵を絞って一生懸命に取り組めば、おのずと信頼関係が築けていき、道は開けるものである。教師の真剣さは子どもに伝わる。魂と魂が響き合って、お互いに影響し合うものである。だから、子どもの前で教師は傲慢になってはならない。

強さも弱さも明るさも悩み事もある人間臭い教師。いつでもどこでも、どんな時でも絶対に子どもの味方になってくれる教師を子どもたちは求めている。

～兵庫教育大学と地域の交流ページ～

うれしの交差点

自治体との真の連携をめざす地域貢献事業

兵庫教育大学では、文部科学省から国立大学の地域貢献活動を支援する「平成15年度地域貢献特別支援事業費」の採択を受け、兵庫県や関係機関等と連携・協力して〝ふるさと（兵庫県）→はぐくむ（兵庫教育大学）→美しい兵庫（連携事業の成果）〟をコンセプトに9つの事業を展開しています。

生涯学習

●兵庫情報ハイウェイ「ひょうごe－スクール」支援事業

県教育委員会等と連携し、生涯学習コンテンツの開発、配信などをしていきます。

●スクール・パートナーシップ事業

学校現場での課題解決等や生涯学習ニーズへの支援として、要請に応じて教官を講師として派遣。学校現場や生涯学習機関等との連携を強化していきます。

人材養成

●地域指導者養成講座 －輝け個性！子ども夢プラン－

県の「スポーツクラブ21ひょうご」や「ふるさと文化再発見アクションプラン」などの事業に支援協力します。

●「ハイスクール・CORE・プログラム」高大連携支援事業

県教育委員会と連携し、県内の高校生に大学の授業への参加の機会を提供します。

文化

●北播磨地域学育成事業

住民による“北播磨地域学の創造”を北播磨県民局と共同で支援。小学生の総合学習、識者の史談会や研究において、発表の場の提供やデータベース作成などで協力します。

ふるさと・はぐくむ・美しい兵庫

情報発信 住民サービス

●地域子育て教育相談事業

県教育委員会と連携し、地域における子育ての支援と地域の教育力の一層の向上をめざし「1日教育相談」を行います。

●地域貢献ハンドブック刊行事業

教官の地域貢献活動の実績やニーズへの対応案内、教官の研究分野の紹介、学生ボランティアの案内、大学の施設利用案内などを掲載した冊子を刊行します。

地域課題

●地域課題解決型実践的学習プログラムの開発・実証 －ひょうごオープンカレッジ開講－

県と連携して社会人専用専門講座を開発するとともに、実証的研究のための試みとして「ひょうごオープンカレッジ」も開講します。

●地域における青少年を育むメニューの研究調査

北播磨県民局と連携しながら、地域における青少年を育む体験メニューの実施状況や影響などを調査し、効果的な地域体験学習の体系的メニューを開発していきます。

Books

附属図書館で見つけたおすすめの一冊

からだことば

立川昭二著　早川書房

推薦人：島崎　保（教育基礎講座）

私たちは日常生活の中で「足手まとい」とか「目をつける」といった体の部位を含んだ表現をたくさん用いています。これは、私たちが環境に対してまさに「体ごと全体で」反応していることを示しています。ところが、この「からだことば」が次第に消えていっていると筆者は指摘します。以前は「腹が立つ」とか「頭にくる」という表現であったのが、「むかつく」とか「キレる」という言葉が使われるようになってきました。前者は一旦、怒りの感情が体に入り込んでいるのに対し、後者では「全然体に入っていない」のであり、「関係が遮断されている」のだといいます。私たちの回りから「体感」や「体験」が失われつつあることを示しているのでしょう。身近な「ことば表現」を通して、さらに身近な「からだ」の意味を考えさせてくれる書であると思います。

子どもたちの想像力を育む
アート教育の思想と実践

佐藤 学・今井康雄編　東京大学出版会

推薦人：福本謹一（芸術系教育講座）

本書で佐藤学は「現代におけるアートの動向や変化に対して、教師や教育学者の想定している『アートの教育』はあまりに時代遅れである。アートの教育を『美術の教育』『音楽の教育』…と教科や題材のジャンルごとに発想し、教科の境界線を一歩も超えない実践や議論は、18世紀の枠組みを一歩も抜け出していない」と従来の学校教育の音楽、図工（美術）の教科の在り方を批判する。

そして、「創造性」と「想像力」という2つの概念を中心に子どもが『もう一つの自己』『もう一つの現実』と出合うための「アートの教育」を提唱している。この主張は、教科の再編自体を意味するものではなく、方法概念を前面に据えて生活とのかかわりをもったアート教育の再構築を企図したものである。

附属施設リレー紹介

第4回 附属実技教育研究指導センター

案内人
松下健二
センター長

附属実技教育研究指導センターは音楽、美術、体育、語学（書写・書道を含む）の各分野にかかわる実技教育の研究や具体的指導技術の開発を行っています。実技教育の企画運営、学生への自学自習の場の提供などを通じて、その実技能力と指導能力の向上を目的としています。

センターは分室の形を取っており、音楽・芸術分野は芸術棟に、体育分野は体育棟に、語学分野は教育・言語・社会棟にあります。関連する講座と同じ場所に設置しているのは、講座とセンターが密接な関係を持ち、連携して実技教育の充実と発展をめざしているからです。

年間の活動は機関誌『実技教育研究』で公表しています。また、センターの趣旨、目的、活動内容、利用方法、グレードの内容を詳細に説明したガイドブックも刊行しています。

実技教育は分かっていても（と思っているだけかもしれません）、できないものです。時間を掛けてじっくりと取り組まなければいけません。学生指導は各教育分野で異なりますが、原則的には学生の能力に応じたきめ細やかな個別指導を行っています。

音楽分野での個別指導

機関誌『実技教育研究』
と2003年度版のガイドブック

1982（昭和57）年創設。

卒業生・修了生からのメッセージ

Messages From OB&OG

姫路市立大津小学校教諭
平野兼伍さん

平成9年度学校教育学部
教科・領域教育専修芸術系専修コース卒業

卒業してから随分、回り道をしました。ある時は、煙突の上で海を眺めながら排ガスの成分を測定したり、またある時は、子どもの絵画教室でダンボール箱を使ったワークショップをしたり・・。私自身、絵画制作を志しており、卒業後もずっと研究室に出入りさせていただきました。昨年、ようやく新規採用されましたが、長い間、よくぞご指導いただけたものと感謝する毎日です。回り道の貴重な体験を担任する子どもたちとの生活に生かしたいと張り切っています。

兵庫県立福崎高等学校長
藤尾智博さん

昭和62年度大学院修士課程
学校教育専攻教育経営コース修了

福崎高校は生徒数840名で、9割以上の生徒が進学をめざしています。私の経営方針は、知・徳・体の調和のとれた21世紀を担う地域社会のリーダーの育成です。この方針に沿って生徒のニーズに応えるべく、①45分×7限授業②第2学年から5類型の導入③文武両道による心身の鍛練④開かれた学校づくり、を基本として日々実践しています。学校経営のバックボーンは、指導教官であった清水俊彦教授をはじめ兵教大大学院の諸先生方の教えにあります。

岐阜聖徳学園大学助教授
吉水裕也さん

平成14年度大学院博士課程
学校教育実践学専攻社会系教育連合講座修了

中学校・高校の教員生活を10年以上経験してから博士課程に進みました。大学院時代は、理論と実践を結ぶものは何かということを考えながら論文作成に取り組みました。大変丁寧にご指導いただいたおかげで研究を一つの形にすることができました。そして、今年から大学で社会科教育に関連する科目を担当しています。大学院で受けた教育と中学校・高校の教育現場での経験を生かし、研究と教員養成に力を入れていこうと考えています。

Campus Topics

キャンパス・トピックス

2003.7～12

大学創立25周年を記念してシンポジウムを開催

8月9日、神戸国際会議場で「創立25周年記念シンポジウム」を開催し、兵庫県をはじめ近隣府県の幼稚園、小学校、中学校、高校の教員など約700人が参加しました。

中洌正堯学長のあいさつに始まり、河合隼雄文化庁長官による「これからの学校教育を支えるもの」と題した基調講演、「学校教育と高度専門職―新しい時代に対応する人材をどう育てるか―」をテーマにしたパネルディスカッションを実施しました。

パネルディスカッションには、木谷雅人文部科学省大臣官房審議官、梶田叡一京都ノートルダム女子大学長、武田政義兵庫県教育長、中尾豊喜大阪市立十三中学校教諭、中洌学長の5人のパネリストが出席。本学がめざすべき専門職大学院制度による学校教育の領域における高度専門職の養成について、それぞれの立場から意見が述べられ、参加者は熱心に聴き入っていました。

講演する河合文化庁長官

7月

6日
◎附属幼稚園ほしぞらカーニバル
7日～8日
◎SPP事業「教員研修―理科教員のための組換えDNA実験講座―」
11日
◎大学・高等学校教育研究懇談会
20日～9月13日
◎公開講座「スポーツが好きになる親子教室」（全10回）
26日
◎大学説明会（学部）
◎「小・中学生のための夏休みサイエンス&ものづくり教室」
28日～8月1日
◎平成15年度新産業技術等指導者養成講習
◎平成15年度附属学校における初任者研修等に係る宿泊研修
28日～8月29日
◎平成15年度兵庫県・神戸市教育職員免許法認定講習
30日～8月1日
◎公開講座「理科実験・観察のカンドコロ」（全3回）

8月

9日
◎創立25周年記念シンポジウム
23日～24日
◎平成16年度大学院修士課程入学者選抜前期試験
26日～27日
◎SPP事業「教員研修―身近な地形・地質の教材化（その2）―」
29日
◎総合学習シンポジウム

9月

6日～12月6日
◎公開講座「発達が気になる子どもの家庭療育の方法」（全9回）
8日～28日
◎ユネスコ国際交流セミナー
11日
◎学内講演会「タルスキー・ザイデンベルグ論理について」
13日
◎附属中学校体育祭
13日～11月1日
◎公開講座「現代子育て考―すこやかに、豊かに―」（全8回）
20日
◎大学院修士課程説明会
24日
◎前期末大学院（修士・博士）修了者学位記授与式
◎論文提出による博士の学位記授与式
25日
◎運営諮問会議
27日
◎附属小学校うれしのカーニバル

10月

1日
◎創立記念日
2日～11月6日
◎公開講座「楽しく踊ろうジャズダンスII」（全6回）
4日
◎大学院修士課程説明会
7日
◎附属小学校不審者対応避難訓練
10日
◎平成15年度広東省学生訪問団による兵庫教育大学訪問交流
11日
◎附属幼稚園運動会
18日～11月23日
◎ひょうごオープンカレッジ（兵庫教育大学コース）

11月

1日～4日
◎公開講座「絵画制作」（全4回）
15日～16日
◎平成16年度大学院修士課程入学者選抜後期試験
22日～23日
◎大学祭「喜望祭」

AIEJ／ユネスコ青年交流信託基金大学生プログラムを実施

㈶日本国際教育協会が公募した「AIEJ／ユネスコ青年交流信託基金大学生プログラム」に、本学の「初等教育の拡充と改善プログラム」が採択され、交流協定定大学である韓国の大邱教育大学校、中国の海南師範学院、華南師範大学から学生ら11人を招き、9月8日から21日間にわたり同プログラムを実施しました。

参加者は、本学や神戸大学などで講義・実習等を受講したほか、京都や奈良の史跡を訪問。日本の初等教育における歴史の紹介方法を学ぶとともに、本学学生と活発に交流しました。プログラムの成果は今後、韓国、中国、日本の初等教育の拡充・改善につながっていくと期待されます。

受験希望者の高い関心を集めた大学院（修士課程）説明会

本学大学院（修士課程）の受験希望者を対象とした大学院説明会を5月31日から4回にわたり大学院神戸サテライトで開催し、延べ349人が参加しました。

教育課程や平成16年度から新たに導入する制度などの概要説明に引き続いて、個別相談を実施。予定の時間を超えて熱心な質疑応答が繰り広げられました。

兵庫教育大学からのお知らせ

問＝問い合わせ先

◎平成16年度学生募集

☆学校教育学部

◎推薦による選抜出願期間
12月10日（水）～17日（水）
◎前・後期日程等出願期間
平成16年1月26日（月）～2月4日（水）
◎推薦による選抜試験日
平成16年1月27日（火）
◎前期日程・帰国子女特別選抜試験日
平成16年2月25日（水）・26日（木）
◎私費外国人留学生特別選抜試験日
平成16年2月27日（金）
◎後期日程試験日
平成16年3月12日（金）

☆連合学校教育学研究科（大学院博士課程）

◎出願期間
12月16日（火）～22日（月）
◎試験日
平成16年2月15日（日）
※上記のほか、科目等履修生（学部、大学院修士課程）、研究生、連合学校教育学研究科研究生も募集しています。
問入学主幹室 TEL0795・44・2067

☆附属小学校

◎募集人員
108人（うち約60人は附属幼稚園の修了者）
◎出願期間
平成16年1月5日（月）～9日（金）
◎書類審査結果発表および抽選会
平成16年1月19日（月）
問附属小学校事務室 TEL0795・40・2218

☆附属中学校

◎募集人員
120人（うち約90人は附属小学校の卒業生）
◎出願期間
平成16年1月13日（火）～16日（金）
◎書類審査結果発表および抽選会
平成16年1月28日（水）
問附属中学校事務室 TEL0795・40・2224

◎演奏会

☆芸術系音楽分野学外演奏会

学生と教官が演奏します（入場無料）。
◎開催日・時間
平成16年1月16日（金）・19:00～
◎場所
伊丹アイフォニックホール

☆芸術系音楽分野定期演奏会

学生が演奏します（入場無料）。
◎開催日
平成16年2月7日（土）
◎場所
兵庫教育大学講堂

☆学部卒業演奏会

音楽分野の学生が、各々の専門の楽器で4年間の研究成果を披露します（入場無料）。
◎開催日・時間
平成16年2月21日（土）・14:00～
◎場所
兵庫教育大学講堂
問芸術棟事務室 TEL0795・44・2249

◎第5回兵庫教育大学美術展

芸術系美術分野の教官、実技センターの美術教官、美術専攻の大学院生と学部3、4回生による美術展です（入場無料）。
◎開催期間
平成16年3月2日（火）～7日（日）
◎場所
県立美術館原田の森ギャラリー（神戸市）
問芸術棟事務室 TEL0795・44・2249

◎教育相談

大学院神戸サテライト心理教育相談室では、臨床心理士の資格を持つ教官や児童精神科医が中心となって、大学院生とともに、主に学校や家庭において心理的援助を必要とする子どもとその家族を対象に、こころの悩みや発達についての相談に応じます（無料）。また、子どもたちへの対応に悩んでいる教育関係者へのコンサルテーションにも積極的に取り組んでいます。
◎相談の受け付け
電話予約が必要。受付時間は月曜～金曜（水曜を除く）の14:00～19:00
問大学院神戸サテライト心理教育相談室
TEL078・321・1432（神戸市中央区北長狭通4-7-30 パルモア学院5F）

◎附属小学校研究発表会

研究主題「学びをひらくカリキュラムの創造（3年次）
―少子化に対応し社会性・養護性を育むための『人間発達科』教育プログラムの研究開発―」
1日目…全体会、授業公開（人間発達科・総合的な学習）、協議会
2日目…全体会、授業公開、分科会（各教科・道徳・英語）、講演（講師：養老孟司東京大学名誉教授）
◎開催日
平成16年1月29日（木）・30日（金）
◎場所
附属小学校
問附属小学校 TEL0795・40・2216 FAX0795・40・2219
http://www.school.hyogo-u.ac.jp/element/index.htm
E-mail:element@school.hyogo-u.ac.jp

◎社会系教育講座講演会

◎開催日
12月19日（金）

☆第1部
講演会「武道文化とその教育的意義」

◎時間
15:00～16:30
◎場所
兵庫教育大学教育・言語・社会棟122号室
◎講師
アレキサンダー・ベネット（国際日本文化研究センター・助手）

☆第2部　演武会

◎時間
17:00～18:30
◎場所
兵庫教育大学武道場
◎演武者
アレキサンダー・ベネット、中村哲（居合道顧問）、居合道部員有志
問中村哲研究室 TEL0795・44・2154
E-mail:tenaka@soc.hyogo-u.ac.jp

速報―― 厳しい状況の中、兵庫教育大学の平成15年3月学部卒業者の教員就職率が69.8%（9月30日現在）で、昨年の68.4%（全国1位）、一昨年の57.1%（全国2位）を上回りました。国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の教育就職率ランキングについては、文部科学省から近々公表される予定です。

Hyogo University of Teacher Education

編集後記

教育改革が進む中、学ぶ力、生きる力といった機能的な学力が重視される一方で、基礎学力の定着という実態的な学力の必要性も声高に叫ばれるようになった。教科の授業時間の減少によって、学校教育は大きな忘れ物をするかもしれないという危惧の声もあり、今回は、その中でも芸術教育の意味と可能性について考えることを特集として取り上げた。想像力や感性に働き掛ける取り組みがますます減少する中で、子どもたちにどんな明日を届けていけるのか、今、真剣に議論すべき時が来ているのではないだろうか。（ふ）

◎あなたの声をお聞かせください

「教育子午線」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりをめざしています。ご意見、ご感想、ご希望などがありましたら、どしどしお寄せください。

●あて先：〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1
兵庫教育大学庶務課広報・連携担当専門職員
TEL0795・44・2053 FAX0795・44・2009　E-mail：office-2053@office.hyogo-u.ac.jp

Kyoiku-Shigosen
教育子午線
第5号　2003年12月発行
発行／兵庫教育大学 広報誌編集委員会
http://www.hyogo-u.ac.jp
編集協力／(株)神戸新聞マーケティングセンター

この印刷物は再生紙を使用しています。